
ラブカクテルス その45

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その45

【NZコード】

N5141D

【作者名】

風雷人

【あらすじ】

今宵は旅の思い出に浸りながらのカクテルはいかがでしょうか。
ご賞味あれ。

いらっしゃいます。
どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフイズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティニー？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は旅の友でござります。

「じゅつくじづじゅ」。

俺は悪ガキ。

この中学ではナンバー1だ。

なかなかいい響きだが、俺は納得いかない。

なぜならこの中学にはナンバー1が一人いたからだ。俺を含めて。やつは俺の隣の小学校にて、高学年の頃から噂は兼がね聞いてはいた。でもその頃はそんな事、これっぽっちも鼻にさえも掛けていなかつたが、中学に入ると同じクラス。

当然気にしないことなどできなかつた。

入学式の日は、さすがに黙つて様子を伺つたが、次の日はそつもいかずに、遂に衝突となつて、放課後体育館の裏に集合と言つことになつた。

当然サシ。一対一の勝負。

奴は俺より一回りガタイが大きく、しかも顔もイカツイ。誰にもな

い迫力とオーラがあつた。しかし俺も負けではない。

俺は昔からなぜか喧嘩に負けたことがない。秘訣は足技だった。

腕を使うことも当然だが、蹴りは接近戦なら打ち出してくる瞬間がわかりにくいくらい分、よけられずにヒットする確率が高く、しかも拳より破壊力がある。

また、ある程度の距離がある場合なら、回し蹴りが有効で、遠心力と重なった力ときたら、大抵の相手を沈められた。

何気ない蹴りでも、当たれば相手が痛がるのを小さい時に気付き、俺は自分流で蹴りを育ててきたのだ。そのおかげで向かう所敵なしになつたと言う訳だつた。

そんなんだから俺は喧嘩を恐いとは思わず、むしろワクワクすると言つても過言ではなかつた。

俺は少し遅れ気味に体育館の裏に向かつた。

そこにはやつが仁王立ちをして、顔を引き締めて待つていた。

やつの足元はサクラの花びらが無数に落ちていて、やつには似合わない色をしていた。

なんだ逃げたのかと思つたぜと、やつは俺を挑発した。

俺はその言葉を鼻で笑うと、やつは待たされたイライラからか、いきなりかかってきた。

サクラが二人の殺氣を感じたらしく凄い量の花びらを振り散らした。俺は身を構えて、向かってくるやつの顔めがけて得意の回し蹴りで応戦した。

蹴りは見事に決まり、その手応えはしつかりしたものだったが、やつはそれでもまだ立つていて、俺をなんとか捕まえようと向かつてきた。

近づいてきたやつの太ももに強烈な一発が入つた。やつは痛がつたが、それでも倒れる瞬間俺の襟首を掴んだ。

俺はそのままに離れようとしたが、掴んだやつの手はガツチリ

と硬く、何をしても開こうとしない感じだ。

やつは迫力のある不気味な笑みを浮かべて、俺の顔面めがけて拳を振り下ろした。

俺はそれを避けることができず、「一発もらい、それでも苦しい態勢からだつたが、膝蹴りをやつの頬に食わすことができ、要約体を離して自分が鼻血を出していることに気がつくまで冷静さを戻した。やつも肩で息をしてこちらの様子を伺つてゐる。

俺初めて喧嘩相手が手強いと感じ、少し興奮しながら取り乱し、だがなぜか嬉しいと思い薄笑いを浮かべた。

それを見たやつもなぜか笑つて、大声とともに突進してきたのだつた。

俺は蹴りをだそうとして構えた。しかし、やつはなんどこの俺に回し蹴りを仕掛けてきた。

かなりの無茶苦茶な蹴りだつたが、不意の攻撃に俺は慌てて避けられずに、かすつただけだつたが、食らってしまったのだつた。

やつはまたそんな俺に乗りかかろうとしたその時、誰かが一人に口を挟んできた。

やつと俺は二人揃つてその声のする方を見ると、そこには見るからにイカツイ上級生たちが五人、凄みを効かせてこちらを睨んでいた。俺とやつは構えていた手足を下ろして、何の用だと聞こうとしたが、聞くまでもなく、向こうがペラペラと話し出した。

その内容は、俺とやつが兼ねてからの噂の連中だと聞いて、調子に乗らないうように言い聞かせにきたと言つた。そして手下になるよう誘つてきたのだった。

俺は笑つた。笑つちやつた。

すると横でやつもケタケタと笑つてゐる。

上級生はそれを見ると興奮して五人一気にかかつてきたり。

俺とやつは結果的にそれを一人で相手をするしかなく、暴れまくつた。

俺とやつは必死にその喧嘩を楽しみ、いよいよどちらもへ口へ口に

なってきた辺りで先生が止めにきて、全員クモの子供になつて、そこから逃げたのだった。そしてなぜか俺とやつはどちら共なく先を行き、ある程度の場所まで行つた曲がり角の塀に身を隠すと、後を追われてないことを確認し、ヨレヨレとしゃがみ込んだのだった。俺荒い息を吐きながら、途切れ途切れにやつのことを誓めた。するとやつも俺を誓めたが、でも俺の方が強いけどおどけた。

俺は慌てて反論したが、そんなムキになる俺をやつは笑い、まあ互角つてことにするかと言い、俺も違いないと妥協したのだった。気付くと、俺もやつもサクラの花びらだらけだったが、その格好がまんざらこやでもなかつた。

そんなことがあってから一人はお互いを認める存在としてよく一緒に悪さをする仲になつていつた。

しかし、次の年の暮れのある日、やつは元気なく俺に親の都合で引つ越しが決まり、来年にはもう町にはいないと言つた。

俺はかなりショックだったが、二人にどうにができることでもなく、歳の幼さを恨んだ。そして一人はやりきれない気持ちのまま煮えきらない時間を無駄に費やしたのだった。

やがて時は容赦なく進み、やつは行つてしまつたのだった。

やつがいなくなつてからと言うもの、俺はまるで蟬の抜け殻のように背中から魂が抜けてしまつたままの空っぽだった。

学校にはとりあえず通つてはいたし、適当な悪さもやつてはいたが、何の楽しみも感じることなく時間はカチカチと過ぎ、やがて三年の春になつた。

俺はそんなままの自分がいやで、サクラの花びらが自分の肩にヒラヒラ落ちてきたのを手に取ると、やつが何だか呼んでいるように思ひ、やつのところへ旅に出ようと、自転車に跨りこぎ出したのだった。

やつの越した先はややうすらと覚えている、聞いたこともない他

県の住所。

きっと車でも一時間は係るはずの場所だった。

幾つもの川を渡り、山も五つは越えただろう辺りで、俺の力はそろそろ限界にきていた。

少し体を休めようと、古い公園に寄り、自転車を投げ出すように停めるべく、隣接しているテニスコートの脇に丁度いいベンチがあったので寝そべった。

ここがどこだかも分からずに青い空を見ると、その空をサクラの花びらがサラサラと風に泳いでいる。

俺はやつに応援されている気になつて、少し元気を取り戻し始めた。そんな時、空とサクラを横切つて見知らぬ顔がヌツと目の前に現れた。

かなり悪そうな顔をしている、同じ歳くらいのヤローだった。

その表情ときたら、決して歓迎ではなく、むしろ威嚇しているようだつた。

俺は、なんだコイツと睨み返して体を起こすとともに、そいつの額ギリギリに勢いよく近づき、何の用だと呟つた。

そいつは反射的に体を反らせたことで、俺の方が優位立場になつたことを悟り、少しどもりながら、てめえこそ見ない面だがどこのもんだと、少し体の位置を戻すと凄んだ。

しかし俺は少しなまつた言葉が面白く、クスクス肩を刻んで笑つていると、てめえ生意氣だつと言つて殴つてきたが、俺はそれを避け、座つたまま軽い蹴りで一発そいつの腹に食らわせた。

そいつはかなり大袈裟に痛がり、畜生つ、今に見てろと逃げて行つた。

俺は面倒は「めんだと思ったが、やつへの土産話にいいかなと、それを待つてみることにした。

それ程時間も経たないうちにそいつは戻つてきて、かなり離れたところから大きな声で俺を指差しながら騒がしく呼んだ。

目の前まできたそいつは、さも得意な顔で嬉しそうに、待たせたなーと、俺を覗き込むようにして言った。

しかし俺はそんなそいつの言葉など聞く暇もなく、肩に強烈な一発を食い、危うく吹っ飛び倒れるところだつた。

そいつの「ヤーヤした顔を」ソソに、俺は踏ん張つた足をぐつと伸ばして飛び出した。

構えたそいつを通り越して、強烈なはたきを胸に返した。
そう、それは偶然にもやつだつたのだ。

俺とやつはおーっと、まるで雄叫びをあげるように満面の笑顔を浮かべてポカポカと頭と体を叩き合ひ、そんな様子を不思議そうな顔をして見ていたそいつにも、俺は礼を言つてポカポカやつた。

そいつは何がなんだか分からずにそんな俺の手を、頭に群がる夏の虫を追い払うようにペシペシとはいた。

やつは俺にどうしたと聞くので、サクラ見てたら何かお前が呼んでる気がして自転車できたと、俺が言つと、飛び上がって驚き、でも呼んでないぞと、じつらの心の中を覗いたかのような顔をしておどけた。

俺が、じゃつ、帰ると言つと、ウソウソ呼んだよと、またからかつてきたが、今度はスネないで大きな声で笑うのだった。横にポカンとこるそいつがいることも忘れて。

もう夜になつて、所持金も大してない俺は、やつのところに厄介になることにしたが、やつの親の条件で家に連絡を入れると、母親の心配した泣き声が受話器の向こうで反響して、くだらない説教の後に父親が迎えにいくと言つて、一方的に電話を切られた。

横でやつはクスクス笑つていたが、俺が顔色を変える前にそれを止め、やつの部屋に上がつてくるよう、階段を先に上がつて行つた。

やつは久しぶりに会つたからか、ヤケに色々話をしてきた。しかしその内容はかなりのもので、じつに越してから大した時間も経

つてないのに、親父さんが病氣でいきなり亡くなつたことや、今は良くなつたが、母親の様子がおかしくなつたこと。新聞配達のバイトを始めたこと。そしてこの頃、こっちの中學で母親に心配させまいと柔道を始めたことを語り、俺はなんと答えたらいか分からず、険しい顔をしていると、なんだ難しい顔しやがつてと、手元に転がつていた脱いだ靴下を投げてきた。そして、俺はこの頃どうだと聞いてきて、何も答えられずにいると、なんだ、一人でいないと寂しくて落ち込んでたかと、またおどけるのだった。

俺は答えを返す代わりに、やつに向かつて、大人になつたんだなと咳いた。

やつは、おう。まあなどだけ言つと、また照れ臭そうにもつ片方の靴下を投げてきたので、俺も自分の靴下を投げ、当然投げ合いになつた。すると下から、食事ができたからふざけてないでさつさと降りて来なさいと、やつの母親に言われ、やつは明るく返事をしたのだった。

夕飯の時のやつの母親は常に明るく、そんな不幸があつたとも思わせない話し方

で、やつのことを面白おかしく話し、照れるやつの頭をパシパシと、丈夫だけが

取り柄だと笑つて二人の食事を見守つた。

そして俺に、親に心配掛けるんじゃないよと、優しく、しかし厳しく言った。

初めに家に電話しろと言つた言葉は何の重さも感じなかつたが、今

聞く言葉一つ

一つには、胸を締め付けられるくらいの重さを感じた。

俺は久しぶりに人にはつきりした返事をして、それを聞いたやつが

そんな俺の頭

をパシパシとこづくのだった。

そんな一時はやつの家のチャイムで終わりを向かえた。

俺の親父がきたのだつた。

やつの母親が玄関に出た時に、親父の太い声が何度も何度も謝るのが聞こえて、俺はしぶしぶそこに出でいくと、親父は帰るぞと、俺の頭を無理矢理下げさせてお礼を言つた。

俺はその手を退かして、自分から頭を下げるお礼を言つた。

それを見たやつはまた来いよと言い、今度は電車でなと付け加えた。

俺はうるせいと小さく言つと、親父の軽い拳がまた頭をはたいた。

それを見て、やつとやつの母親は笑つた。

自転車を車に積み込むのを手伝いながら、俺は照れを隠しながらも親父に礼と、反省を言葉にした。

親父は分かつてんならもういいと、無愛想に言つて俺の頭をぐりぐり撫でた。

俺はそれを振り払い、車に乗り込んだ。そして親父に、帰つたらキックボクシングやりたいと言つた。それを聞いた親父は少し俺の顔を見て、やればいいと、また無愛想に言つて車を出した。

みるみる強くなるであろうやつと、もう自分自身を見失わないために、窓を開けたままのまだ冷たい春の風に舞つサクラの花びらに、俺は硬い決意が搖るがぬよう、心の中で約束を交わしたのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのじ来店、心よりお待ち申し上げております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5141d/>

ラブカクテルス その45

2011年1月27日13時07分発行